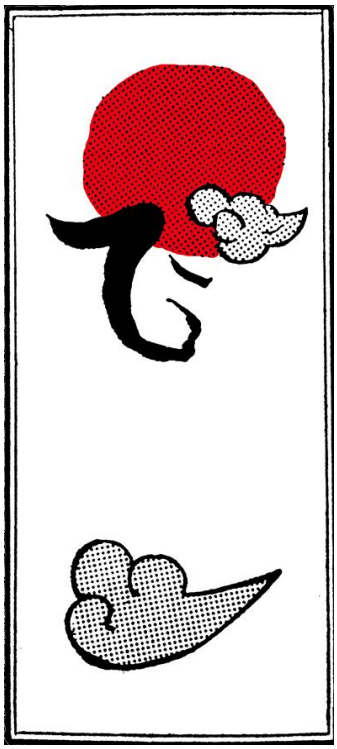


第１１號
月　１　回　發　行
ひの心を繼ぐ會
〒799-1336
住所:愛媛縣西條市
上市甲 720-1

領　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は國家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（四）　（大和世界の建設）
古事記

竹葉　秀雄

北極に何故磁極があるのか

地球の磁氣は地球が一大磁石であるとして考へられるけれども、地球の內部がキュリー點（熱が高くなると磁化がなくなる。磁化が０になる溫度をいふ）より高いので、この說には無理がある。

地磁氣は太陽の黑點の變化によつて急激に變化すること（磁氣嵐）があるのは、太陽から電子などの荷電粒子が飛んできて、地球のまはりをまはつて電流を作り、それが磁界を作る。この環狀電流が地磁氣の原因の一部であると考へられてゐるが、これも完全な說明とはならず、まして、北極の地球磁場があるとの說明にならない。

北極南極の寒冷によるのか。

北極に巨大なる磁石が埋藏されてゐる故か。

磁場は、空中に貯へられたエネルギーであるといはれる。電流が磁界を作ることによつても考へられることであるが、最近の物理學では、電場と磁場の本質は同じものだと言はれ、更に注意されることは、電場も磁場も光子で作られ、その電気力も磁気力も光子の交換力であるとされ、光子の波を光子での交換力であるとされ、光子の波を電磁波と言ふてゐることである。

太虛は、玄のまた玄で、宇宙エネルギーの―靈氣と言つてよい―の充滿されたところであり、萬物生成の元である。宇宙は一大生命であるから生命エネルギーと言つてもよく、生命なるが故に波動してゐる。この波動が言（ことば）である。この波動が一秒間に一の下に二十の〇を附した數字に達したとき光子エネルギー（光輝性のガンマー線）となり、一個のエレクトロン（陰電子）と一個のポジトロンに變じ、物質に轉化する。電氣力、磁氣力ここに生じ、萬物ここに成る。天地の開闢がここにあるのである。

一念三千、今、私は北極上空、現代物理學から天文を思ひ、更に東洋の神仙玄道學から日本神道を思ふ。

古から、北極の空に、北極紫微宮（ほっきょくしびきゅう）があり、ここが根本神界であつて、ここの方針に基づいて太陽神界があるといはれてゐる。また、シリーアス星→北極星→アンタレス聖→太陽系と統一され、人が今の世に生れてくる時は、母胎の一角、一通路を通つてきたが、天の靈魂が地上人類世界に來るには、天の一角、北極星→アンタレス星を通るのであると言ふ人達もある。

ダーウィンの進化論は果して正しいであらうか、アミーバーから漸次進化して、猿から人間になつたのであらうか。神（ここでは自然といつてもよい）はアミーバーのみを作つてゐるものとしなければ、進化論はなりたたない。人間に近い猿もゐるし、猿に近い人間もゐる。然し、猿の子孫が人間になるのであらうか。

私は、種の起源に相異があると考へる。

牛は牛として進化し、馬は馬として進化するが、牛が馬になつたり、馬が牛になつたりはしないと思ふ。瓜の蔓には茄子はならないと言ふのが本當だと思ふ。

宇宙の根元は宇宙エネルギー（玄子、靈子、生子、宇宙素といふもよし）で、自ら波動して光子エネルギーとなり、電磁場を生じ、陰陽二氣→陰陽二電子を生じ、結びの作用によつて、核子→原子→分子→森羅萬象となる。氣體・液體・固體ともなり、鑛物・生物・神靈ともなる。

また、一方、光子がつづまつて靈體―個々の靈體―となり、幽身→光身→香身→霞身→牙身（芽身）→形身となる、「靈凝法」また「下り魂」の道によつて、幽體が顯體となり、うつし身としてうつし世に、萬物となつて肉眼に寫つてゐるのであるとも考へられる。

その根元を天御中主神とし、結合と生産の作用を産靈の神として、森羅萬象八百萬の神々の發生となり、すべての原子に核があるやうに、靈を中心とし、その靈はすべて同じきもので、靈波をもつて感應されるもの、一本の絲で貫かれた五百箇御統玉（魂）である。また、すべてには縱の道統―天の御柱（伊勢神宮の正殿の御床下に御柱を奏建す。之を心御柱又は齋柱と稱す。頗る神祕の儀ありときく）―がある。天御中主神→天照大御神→天孫降臨となるのである。幽身から形身への靈凝法・下り魂の道が知られれば、天孫瓊々杵尊が幽體にして地上に降られ、顯體となり給ふたとも考へられる。

エネルギーが貯へられ電磁波の響高き北極の上空、北極星（紫微宮）一の道統の中、神靈が地上に來る通路と思考されるその道條、光子の靈動さかんにして、萬靈萬物生ずる、その波動韻律の中にあつて、私は大祓の詞を奏上するのであつた。

以上は、私が昭和三十九年九月、ＩＬＯよりの召喚によつて、ジュネーブに行く途中、北極上空の靈感を、機關紙「ひ」に載せた文の一節であるが再びここに載せてこの書の緒言とする。

（以下次號）

第一章　農の哲學的考察　～第三節　農本生活　第二項　本末關係～

菅原　兵治

物と金

前項に於て自然と人間に於ける本末關係を知れば、物と金―自給經濟と貨幣經濟との間の本末關係も亦自づから明かになつて來ることである。世間では地獄の沙汰も金次第といふが、然し金が其の價値を發揮するのは、人間を相手にして、物と交換することを可能とする前提の下に於てのことである。隨つて自然を相手に直接生産に從ふ農道生活に於ては當然「金」よりも「物」に重點を置くべきである。然るに從來の農家經營の實情を見るに著しく貨幣經濟の俘虜になつてゐる。是は明治以後の重商工的政策、金融資本主義的文明の大きな波に乘ぜられて、知らず識らず其の方向に漂流して來た爲であつて、又止むを得なかつたことではあらうが、然し今や時代が急角度に轉向しつゝある時であるから、眞摯に反省して農本生活の本質より開悟發憤すべき秋であらう。思ふに農工商の職業別によつて「物」と「金」との關係を考察するに大體次の如き形態となるであらう。（圖省略）

細述は之を省略するが、兎に角其の生活に於て農は物を直接生産して之によつて生活資料を得ることが最も大に、工は之に加工して變形するに過ぎず、更に商に至つては僅かに其の位置を變ずるに過ぎず、從つて先づ利潤によつて「金」を得て、其の「金」によつて物資を購入して生活するといふことになる。かくて農本生活に於ては可成物の自給圈を大にして行けば行く程、それが本格であり、隨つて安全である。之に對して商工業は其の職業の本質上可成多くの「金」を得ることを以て本格とするのである。それを一から十まで「金」のみによつて農道生活の利害を計算し、金錢的收入の多寡のみを以て農業を俸給生活者や商工勞働者の生計と比較するやうになつては、結局農業程つまらぬものは無いことになつてしまふであらう。前項に記した王陽明の詩にもある「山中道ふことなかれ供給無しと、明月清風、錢を用ゐず」といふ、錢を用ゐずして得らるゝ處のものゝ價値と樂しみとが解る樣にならねばならぬ。

換言すれば金を使はずに豐樂の生活をなし得るやうな生活が無ければならぬ。金をかけざる豐樂の生活―是こそ實に農本生活の誇りであらねばならぬのである。其處に農村料理の研究、農村醫藥の研究、農村儀禮（冠婚葬祭）の研究、農村娯樂の研究等といふやうなものが、この原理の上に研究されねばならぬ所以のものがあるのである。例へば農家の庭園を見てもわかる。其處には松があり、石があり、花があり、水がある。然しそれ等のものは金を掛けずにも作られる。休日に裏の山に行つて枝振りのよい松の木を掘つて來てはおのが庭に植ゑる。前の川に行つて形の面白い石を拾つて來て其處に竝べる。農家の庭は金を掛けずとも樂しみ得る風流である。之に對して町の庭園或は都會の公園といふものは、一木一草一石一水、總べて是れ巨額の金に依つて購はれたものである。されば都市の金持ちの庭は贅澤であつても、農村の農家の庭は風流である。更に大きく見るならば庭先の田畑、彼方の山川、總べて是れ金を掛けざる天地自然の大いなる庭園である。農村の生活はその凡ゆる點に於て、斯ういふやうに氣付けば趣ゆたかなものになる。

村の小學校の入學の式、卒業の式、其の時の學校の先生に對する報恩の會等に於ても、何も金を掛けてだけ行はるべきものではない。一戸一戸の農家がその手に依つて作つた野菜の料理を重箱に入れて、各々其の一品料理を持寄つて互ひにそれを食合ひながら、村人が和やかに語り合ひ、喜び合ふ。其處に金を掛けざる農村の宴會の面白さがある。五十人集れば五十品料理が出來上る。どんな廉い料理屋に行つても五十品料理を食ふと言つたならば、五圓や拾圓では食へないだらうと思ふ。都會に於ては其の金に依つてのみ購はるゝ所の五十品料理を殆ど金を掛けずに食べ合ふことの出來る處に、農村の生活の特徴があるのである。それを農村の生活に於てまでも一も二も金々と趨つて行つたのでは、畢竟いくら取つても金が足らぬといふことになつて、遂に己れを失ふことになる。此の點に就いて次の事實は大いに參考にならうと思ふ。

東京から十數里の處に在る一農村に於ける事實である。

其の村で數年前から野菜を東京へ行商することを始めてゐた。其の行商に從ふ者は主婦又は娘で、毎日朝早く自家生產の野菜（それが足りない時は近所の青物市場から買ひ集めた野菜）を背負つては東京へ出て行つて行商するのである。往復の乘車賃が定期で割引されるので一日約二十錢、一日に午前午後と二往復も出來るので、平均一圓位の利益はある。農家の女一人の所得が一日一圓の純益收入がある。而かも別にこれぞといふ苦しい勞働に從うでもなく、毎日汽車に乘つては上野の驛に降りて「東京見物」をしながらの仕事で、農家の圃場勞働に比べればまるで遊び半分の仕事のやうなものであるから、こんな「巧い利得」はない。かくて其の野菜行商の婦人の數が次第に增加して、數年後の今日に到つては五六十名の野菜行商夫人が毎日野菜籠を背負つては東京に出て行つて、巧利を得て歸りつゝある。

然し人の世に於ける因果の關係といふものは極めて複雜多樣なもので、「生產者より消費者へ」ともいふべき、この農村婦人の行商が、「巧利」以外に、次の如き諸種の結果を齎すに至るといふことは、餘程周到にして遠きを慮る慧眼を有する士に非ずんば、容易に豫想し難いことであつた。其の豫想し難き點とは何か。之に就いて其の村の小學校長が此の頃悚然として語つてゐた。

第一、小學校に於ける子守兒童の數が非常に多くなつた。卽ち行商に出る者の多くは中年以前の婦人である。從つて家を外にして毎日出る爲に子供の世話が出來ないので、幼兒を小學校に通ふ生徒に託して通學せしむるに至り、此處に連れて行く生徒の教育上より見るも、又、連れられて行く幼兒の養育上より見るも、甚だ憂ふべき現象を生ずるに到りつゝある。

第二、子守兒童を中心として浪費の惡習が生じて來た。卽ち母親が子供を託して自分が出稼ぎするといふので、一面不憫の親心も手傳つて、毎日十錢位の小遣錢を吳れては幼兒を背負はして學校にやる。子供はそれで飴を買ひ、菓子を買つては食ひ且つ食はせる。農村の子供が一日十錢の小遣錢を使ふやうになつては實に容易ならぬ浪費と謂ふべきである。

第三、家庭が寂しく冷たくなつて來る。或る地方の農村の俗諺に「若夫婦は一緒に野良に出して働かせよ」と。この事は陰陽の原理より考ふるも、非常に深い眞理の存することである。然るに妻が朝未明より夜薄暮に至るまで東京に行商して家に居ない。月を帶び鍬を荷うて歸つて來ても妻がまだ歸ら

ぬといふのでは、さなぎだに外的娯樂の無い農村の生活に取つて、堪へ難き寂寥である。其の結果若き男子の心がどう動くかといふことは説明を略しても明察し得ることであらう。かくて村はづれの居酒屋が繁昌し出して來た。

第四、不知不識の間に生活程度が都會風に高まつて來た。即ち着物や食物等も、行商の序に東京から買つて歸る。或は田舍の店から買ふのよりも、流行の柄のよいものを安く買ひ得るかも知れぬが、毎日々々東京通ひしてゐる中に、其の嗜好の程度が如何なるかといふことは申すまでもないことであらう。

第五、田畑が荒れて來た。即ち毎日田圃に出て汗と泥土にまみれて働くよりも、朝晩汽車で通つて、時々は亭主にかくれて活動寫眞でも見ながら金が澤山取れるといふのであるから田畑作りなど馬鹿々々しくなる。遂に自分の家の田畑を棄てゝ、近所の青物市場から仕入れた野菜を背負つてまで出かけるやうになる等々。

此處に私共の最も愼重に深思省察すべき農道經營の根本的問題がある。「君子は義に喩り、小人は利に喩る」と古聖も教えてゐるが、一體農家農村の經營は目前の「利」のみでなすべきものか。而してそれが本當に五年後、十年後、子の代、孫の代まで永く安らけき大利を保ち得る所以であるか。農道の本義に安立しての地味な經營―即ち深き意味に於ける陶淵明の所謂「拙を守る（小悧口ではない）」の生活と、目前の小利小名の獲得に狂喜する「巧利」の生活と何れが農業經營の本道か。勿論是非行商せねばならぬ事情に在る者はせねばならぬであらう。然し本質的考察に於ては、

守拙か、巧利か。

勿論金になる經營はなすべからずとか、金以外の事を考ふる經營はなすべからずとかいふが如き偏屈の主張は排すべき外道の沙汰ではあるが、然かも其の根本的信念を何れに置くか。

守拙か、はた巧利か。

農道生活の上に於て深悟すべき點ではないか。

取材記　崎門（きもん）先賢墓參
～京都・大津を歩く～

三浦夏南

平成三十一年二月二十二日、二十三日の二日間、崎門學研究會（きもんがくけんきゅうかい）の折本代表、關西學院大學の學生庄君とともに山崎闇齋先生（やまざきあんさいせんせい）を始め、崎門諸先生の墓參をさせて頂いた。山崎闇齋先生生誕四百年を記念するこの年に、先生方の墓前に參じ得たことは、先生方の學恩を頂く後代の學徒にとつて誠に有難い限りである。

闇齋先生の學問は崎門學、垂加神道と稱されて居り、國學、水戸學とともに江戸時代の國體思想の淵源として高く評價されてゐる。特に先生の學問は尊皇の絶對信仰とともに、斥霸（せきは）の徹底、即ち天皇と臣民を隔てるあらゆる夾雜物を許さぬ態度に於て拔群であり、國學、水戸學が幕府、藩との關係性の中で動搖が見られたのとは對照的に徹頭徹尾內外の尊攘を一貫された。妥協された現狀に滿足せず、神代ながらの眞正日本の實相を顯現せんとする先生の學問は純粹にして高潔であり、人々に感激と情熱を與へる。また自己不在の抽象的な國體論ではなく、自己の魂に基づいた實踐の學問であることにも注意しなければならない。戰前、戰後を通して、妥協された現實を國體論によつて正當化し、美化するといふことは屢々（しばしば）繰り返されて來た。絶對の國體に基づく維新ではなく、現實と妥協する改善が常識的、現實的と考へられた。しかしながら、妥協に妥協を重ねた日本及び世界は、これ以上延命できぬほどに行き詰まり、腐敗を始めてゐる。今こそ、闇齋先生の徹底的な思想が必要な時ではないか。一時を彌縫（びほう）することを止め、根底の根底からものごとを考へ始めねばならない。崎門學について此處に詳說することは出來ないが、毎月の勉强會でも若林强齋先生の「大學講義」を取り上げて居るので、崎門の精神についてはこれからも 深く學んで行きたい。

今回の旅は、早朝壬生川驛を出發し、晝前に京都驛に到着、そこで折本代表、庄君と合流し、下御靈神社に參拜するところから始まつた。下御靈神社境内には垂加靈社があり、山崎闇齋先生の御靈がお祭りされてゐる。參拜後、資料館を拜觀させて頂いた。闇齋先生の直筆の御著書、掛け軸が多數展示されて居り、先生の御存在を親しく感ずることが出來た。とりわけ感銘の深かつたのは、闇齋先生の御兩親が描かれた掛け軸である。御母様は猫を抱かれ、御父様は紋付羽織姿である。御二人からは何とも言へぬ暖かな雰圍氣が感ぜられ、闇齋先生の敬愛の至情が傳はる名畫であつた。下御靈神社の宮司様のお話によるとこの掛け軸に書かれた先生直筆の文字は先生らしからぬほどに緊張されてゐると言ふ。震へにより文字が亂れてしまふほどに、先生は御兩親を尊敬し、孝養を盡されてゐたと思ふと熱くこみ上げてくるものがあつた。崎門學者の近藤啓吾先生の御文章の一節に、闇齋先生の學道を貫くのは「孝」の一字であると書かれてゐたと記憶してゐるが、その言葉通りの繪である。その掛け軸の前には垂加式で米、水、鹽、煮干しが御供へしてあり、神様としてお祭りされてゐる。

右が山崎闇齋先生の御兩親を描かれた掛け軸

資料館には皇學館大學教授の松本先生や、崎門の大家梅田雲濱先生の玄孫の梅田晶彦先生も拜觀されてゐた。他にも崎門學の門人の末裔といふ方も居られ、闇齋先生生誕より四百年を隔てるもその影響の深く遠いことを實感した。

資料館を出ると梅田先生を加へて四人で闇齋先生の御墓のある金戒光明寺へと向かふ。闇齋先生の御墓は東向きに在り、一說には幕府から御所をお守りするためと言はれて居り、またある說には墓參する人が御所に向つて參拜できるやうにとの配慮からとも言はれてゐる。どちらの說からも先生の尊皇斥霸の思想が御墓の設計にまで現れてゐることが分かる。死して尙ほ皇室を護らんとする先生の七生滅賊の精神である。崎門學では楠木正成公を日本の模範的人傑として仰ぎ、其處に近づくことを修養の目的としてゐる。大楠公は一人尊皇の大事に挺身されただけでなく、一族一家、その末代に至るまで、その精神を傳へ實踐された。一人の生涯だけでなく、世代を一貫されたことが大楠公の偉大さである。崎門も此の點を重要視し、次の世代へと繼承され、發展し行く學問であることをその特徵としてゐる。闇齋先生は江戸時代の初期を生きられた人であるが、尊攘の志士達が活躍したのは、江戸時代の末期、實に二百年の後である。繼承發展の學問、これこそ我々が闇齋先生から學ばねばならぬ重大事である。

次に崎門三傑の一人三宅尙齋先生の墓參の後、幕末のバイブルとも呼ばれた『靖獻遺言』の著者淺見絅齋先生の墓所へと向かつた。先生の墓所は淸水寺の近く、鳥邊山にある。先生の御墓には近藤啓吾先生が建設されたといふ雨除けの屋根が取り付けられてゐた。禦墓のこれ以上の劣化を防ぐ爲である。生涯をかけて絅齋先生の著書『靖獻遺言』を研究して來られた近藤先生の時代を隔てること遠き師への敬愛の現はれである。『靖獻遺言』は幕末志士の必讀書と稱され、吉田松陰先生は獄中に朗讀すること傍らに人なきが如しと言ひ、橋本景岳先生は常に懷に入れて携帶されたと言はれてゐる。描かれてゐるのはシナの忠臣義士八人の王統と民族を護らんとする悲壯な鬪ひの記錄であるが、シナの史實を通じて我が國の尊皇攘夷の至情を內奧より引き出さんとするのが本書の目的である。『靖獻遺言』は漢文で記されてをり、松陰先生、景嶽先生等漢文の素養のある幕末志士には愛讀されたが、明治以後、西洋化から漢文に遠ざかり、戰後益々漢文の敎養を喪失した現代の日本人には難解の書物となつてゐる。この現狀を憂い、『靖獻遺言』の精神を現代に傳導せんとして著されたのが近藤先生の名著『靖獻遺言講義』である。この書を通じて初めて我々は『靖獻遺言』に近付くことが出來る。昨年はさらに松本先生のご努力により文庫版の『靖獻遺言講義』が出版され、『靖獻遺言』はより近付き易い書となりつつある。禦墓に取り付けられた屋根を通して絅齋先生と近藤先生の時空を超えた學問のむすびを我々は鳥邊山にて拜することが出來た。將來的には毎月の勉强會でも『靖獻遺言』を取り上げようと思ふ。

この日の最後は安祥院梅田雲濱先生墓所を訪れた。雲濱先生玄孫の梅田晶彦先生より詳しく説明頂いた。先生の墓所の周りには多くの門人が埋葬されて居り、先生が如何に門人より敬愛されてゐたかが分かる。崎門の學は單なる理論ではなく、魂の學であり、己を磨く學問である。故に先生は尊攘運動の指導者として尊重されてゐただけではなく、人として、君子として敬慕されてゐたのである。その後、梅田先生を含めて四人で御食事を御一緒させていただいたが、梅田先生が雲濱先生の事を熱く語られて居たのが印象的であつた。雲濱先生が所謂理論的指導者ではなく、見識に於ても人格に於ても深く、廣い人であつたといふことが良く分かつた。雲濱先生の評價は、當時に於ても後世に於ても必ずしも良いものだけではなく、誤解して傳はつてゐることも多々あるとのことで、その點を子孫末裔として正して行かねばといふ梅田先生の熱意に心打たれるものがあつた。人にはそれぞれの立場があり、その觀方によつて過去の偉人の評價は分かれて來る。歴史を如何に見るかは、その人が將來に何を描き得るかを規定して行く。我々の愛媛縣に於ても竹葉先生の殘された偉業に對する評價は樣々であると思ふ。一般的には教育委員長として活躍された戰後の竹葉先生に注目する人が多いが、我々は戰前、三間村塾の竹葉先生に强く思ひを寄せるのである。それは我々が現在及び將來に三間村塾の必要不可缺であることを信ずるからである。梅田先生のお話から、竹葉先生の事を連想し、思ふところの多い一夜となつた。

梅田先生は翌日も雲濱先生關係の御都合があるとのことで、此處でお別れし、我々三人は改めて別の店に移動し、崎門學のことから始まり、さまざまなことを語り合つた。折本代表は崎門學に關して近日著書を發表されると言はれ、庄君は保田與重郎（やすだよじゅうろう）と鈴木重胤（すずきしげたね）に關して祭祀と農業について研究してゐるといふ。年の近い同じ世代の同志の努力に負けぬやう、我々もさらに進展して行かねばと思ふ。

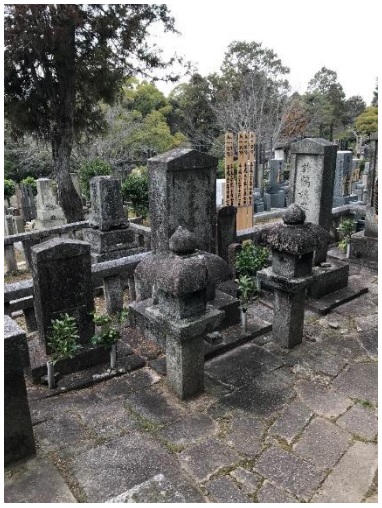
翌日二十三日は京都の絅齋先生の塾があつた淺見絅齋先生邸跡の石碑を訪れた後、絅齋先生生誕の地へと向かつた。書院の中を見學することが出來なかつたのは殘念であつたが、最近建設されたらしい石碑があり、良く管理されてゐるところを見ると、ここにも先生の學脈が生きてゐることが分かつた。この書院の中で『靖獻遺言』の講義が開かれれば、先生もお喜びになるのではないかと密かに思つた。

その後大津の强齋先生の墓所へ。大津はビルの立ち竝ぶ都會ではあるが、靜かな町であつた。その大津をさらに山へと上つて行つたところにひつそりと强齋先生の御墓は佇んでゐた。後で三井寺の方に尋ねると昔はここにお寺があり、この御墓のある地帶も境内であつたらしい。今ではお寺は三井寺の方に移されてゐる。先生はここに住まはれ、遠い道のりを歩いて京都の絅齋先生の塾へと通われたといふ。墓所から驛まで十五分、驛から電車で十分はかかる距離である。この道のりを遠しとせず、自らの足で塾へと通われた先生が御墓から京都へと歸る道中頻りに腦裏に浮かんだ。先生の住まはれたこの地も、江戸時代には今ほどに廢れてはゐなかつたと想像されるが、この山の寂しさに崎門の先生方の草莽の志士としての悲しき生き樣が連想された。出世を願へば、如何なる地位でも望むことの出來る巨才を抱きながらも、純粹なる國體精神を體現し、後世に傳導せんが爲、敢へて一身を省みず、一介の草莽となつて學問に勵まれた先生の御姿が偲ばれる。大志を貫徹するが故にご自身が貧乏されただけでなく、御兩親にも生活の苦しみは及んだといふ。崎門の先生方の孝心を思ふとその苦衷は現代の我々からは想像することも出來ないほどである。先生方があらゆる艱難に耐へて殘された學問を學ぶものとして、如何なることがあらうとも耐へ拔かねばならない。弱音や言ひ譯など決して許されるものではないのである。

歸りの電車の時間があり、殘念ながら、この後豫定していた多賀神社等への參拜は中止となつたが、崎門三先生と稱される闇齋先生、絅齋先生、强齋先生に加へて、勤皇の魁と後世に絶贊される梅田雲濱先生の墓參を行ふことが出來た。先生方の墓前に捧げた祈りと誓ひを體現すべく日々及ばずながらも努めて行きたい。

次回の取材記はまだ決定してゐないが、川面凡兒翁（かわつらぼんじ）の禊行の流を受け繼ぐ稜威會（みいずかい）にて禊を實修したいと考へてゐる。崎門の先生方の如く何事にも動搖

することのない一貫不動の精神を確立するには日本古來の修行、禊が必要であると痛切に感ずるからである。



先生方の御墓

右上：梅田雲濱先生　右下：山崎闇齋先生

左上：若林强齋先生　左下：淺見絅齋先生

とよくも農園だより

三浦　杏奈

今月で、私たちが農業を始めてからちやうど一年になります。まさに「光陰矢の如し」で、一年前の寫眞や日記などを見返すと、毎日體當たりの連續で一年でよくここまで來れたなといふのが率直な感想です。アクアといふ普通車から箱バン・輕トラに代はり、畑まで一時間かけて通つてゐた生活から、畑に五分で行ける家に引越し、鍬で畊しスコップで畝を立てていた農業から、畝立て機やトラクターを使用する農業へと落着きました。

今月から取り掛かつた作業としては、ハウスの建設です。中古で頂いた六メートル×四十メートルのハウスを、父に指導してもらひながら、自分たちで建ててゐます。重機を使用しての運搬作業や樣々な道具の使用、段取りが初心者には難しい點がたくさんあり、手傳ってくれる父に感謝してゐます。力仕事が多く、義兄と父が主軸となり、義姉と私は、パイプを支へる作業や金具で止めていく輕作業を進めてゐます。主人も仕事が休みの日には參戰してゐます。農業は、人が一人增えるだけで、二倍と言はず三倍、四倍の力がでます。女性にも子供にも必ずできる仕事があり、一家團結の基礎となる家業であると思ひます。

さらに、今年からケールの栽培を一反分始めることになり、一反分の肥料撒きや畝立て、マルチ貼りと、二月末の定植に向けて急ピッチで畑の準備を進めました。

今月は雨が多く、晴れの日の間にしておきたい仕事がたくさんあり、少しハードな日が續いてゐました。猫の手も借りたい忙しさの中、甥つ子を一緒に畑に連れていくと…草引きの仕方を覺えてゐることが發覺しました。畑に着くや否や、肥

料袋と大差ない小さな身體をいつぱいに伸ばして、地面を這ふやうにして草を引いてゐました。義姉におぶられた背中から畑仕事を見てゐた日々が、甥っ子にとつては大切な勉強の時間となつてゐたやうです。

これから來る春に、畑で育つお野菜が氣持ちよく芽を出すことができるやう、しつかり畑の準備をして、三月もまた農業に邁進したいと思ひます。

『土居清良』感想集

芝　光恭

『土居清良』覆製本出版おめでたうございます。贈呈下さつて、讀ませてゐただきました。內容が高度で神話に近いやうに感じられます。私が社會歷史を研究してゐればよく理解できると思ひますが、理科系で殘念です。何回か讀み返してみたいと思ひます。ありがたうございました。

松山市醫師會々長　松山市社會福祉協議會々長　村上　博

先日は、『戰國　伊豫の聖雄　土居清良』竹葉秀雄著　をありがたく頂戴いたしました。今年は三閒も大雪が積もりました。小生は、愛媛新聞社相談役の今井瑠璃男氏を塾長にお迎へし、安岡正篤先生の著書をテキストに安岡先生の活學について學ぶ小規模な勉強會に參加してゐました。「論語」「呻吟語を讀む」まではなんとか解說も讀みながらついていけたのですが「光明藏」「易經講座」あたりからついていけなくなり、「易學入門」はさつぱりわかりませんでした。

それでも、今井瑠璃男さんから個人的に頂戴した「日本人の心を育てた陽明學」吉田和男著…中江藤樹、熊澤蕃山、齋藤一齊、西鄕隆盛など先人たちの良知を紹介した書籍ですが、今でも座右の書になつてゐます。「善く生きること」は現代のやうな混沌とした社會にあつて、もつとも大切にしたい心だと感じます。

★活動報告

・二月五日（火）勉强會『農士道』を開催。
・二月十九日（火）勉强會『大學』を開催。

★今後の豫定（よてい）

・三月十二日（火）十九時～二十一時　『農士道』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

・三月二十六日（火）十九時～二十一時　『大學』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

★一燈照隅（いっとうしょうぐう）　萬燈照國（ばんとうしょうこく）

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周圍（しゅうい）の人々の心に「ひ」を燈（とも）し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

年會費

・一般會員　三千圓
・賛助會員　一萬圓
・特別賛助會員　三萬圓
・支援會員　一萬圓